
学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD

壊れた日常

KYOS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD
壊れた日常

【Nコード】

N1089W

【作者名】

KYOS

【あらすじ】

壊れてしまったこの世界で、彼らは生き残れるのか!?

学園黙示録の2次小説です

初めての2次小説なので勝手が分かるまで不定期更新になります

ちなみに原作キャラはほとんどでてきません

001 志遠（前書き）

初めての2次小説です

いろいろ勝手が分からないので勉強しながら書きたいと思っていますのでお楽しみに！

001 志遠

今日、世界が壊れた。

それは突然で、あまりにあっけなく。

俺たちの目の前で崩れ去った。

事の発端は数時間前……

ちよくちよく授業をサボっているクラスメートの小室が、同じくクラスメートの宮元と井豪をつれて授業を抜け出した。

その直後、スピーカーから先生が学校内で暴力事件が発生していると放送中何者かに襲われたようで、絶叫の放送が流れる。

しばらく静寂が包まれたが誰かが我に返り、教室を駆け出す。

それにつられてパニックになったクラスメートが我先にとどこかへと走り出す。

こういうときはまず先生が落ち着かせるもんなんだが……。

ちらっと教卓を見てみると、そこは無人。

というか、気づけば教室内は俺一人。

「先生、少しは落ち着けよ……」

誰にも聞き届けられないつぶやきが教室に響く。

とりあえずなんか直感でやばいことを感じ取った俺は、幼馴染であること琴音に連絡を取るために携帯を取り出す。

電話帳から琴音を選び出し電話をかける。

何回かコール音が聞こえた直後。

「現在電話が込み合っております。そのままお待ちいただくか、し

ばらくして……………」

ピッ

電話を切る。

うわー、なんか本気でやばそうな状況。

琴音に合流したいんだけど、あいつはひとつ年下で下の教室だ。

無闇に移動したら入れ違いになりかねないし、そもそも動かなかつたら状況が分からない。

とりあえず不審者が入ってきたんなら逃げやすい校庭に生徒を集めてるはずだけど……

そう思って窓から外を除いてみると、

「ぎゃああ!!」

「ひい! た、助けて……いぎゃあ!!」

……地獄絵図が広がっていた。

いやいや、何この某ゾンビゲームみたいな状況。

人が人に襲い掛かって、殺して。

そして今度はその死んだはずの人間が今度は生きてる人間を襲って。

いやもうこれ、バイオ○ザードじゃん。

しかしどうするかね、これ。

この状況じゃあ下手に探し回っていたら囲まれてあいつらの仲間入りになりかねないし。

とりあえず琴音と連絡をとればいいんだけど、携帯は通じないし

……ん?

まてよ?

そういえばいつかの大地震のときに、電話が通じなかったけどネットが繋がったって話を聞いたことがある。

だったらメールならデータだから通じるんじゃないのか?

そう思ったら即実行。

『無事か？　もしも無事なら剣道場に集合してくれ
ゾンビみたいなやつらには決して近づくな、襲われただけでやられ
かねない』

用件だけ書き込んでメールを送信する。

少し時間がかかったけどちゃんと送信されたみたいだ。

あとは琴音が生きてることを願うばかりだ。

携帯をポケットにしまつて教室の扉に静かに近寄る。

廊下のほうを伺ってみるが何の気配もしなかった。

外からは悲鳴ばかり聞こえるのにそれとは大違い。

足音をさせないように廊下を進むが、やはり何も出てこない。

ちよつと急ぐか。

極力足音を立てないように小走りに走り出す。

ついでに途中に金属バットが落ちていたから拝借して。

剣道場に急ぐ俺だった。

002 琴音（前書き）

この小説にはオリキャラばっかで原作キャラがほとんど出てきません
ということは今ここで書きました

002 琴音

世界が壊れてしまったその時。

私は教室で授業を受けていた。

夕べ夜更かしをしてしまって授業中うとうとしていたらいきなり教室が騒がしくなったことに気づいた。

見るとみんな窓の外のほうを見ている。

その時、スピーカーから先生が切羽詰った声で校内で暴力事件が起きていることを告げ、そのままその先生の悲鳴とともに切れてしまった。

静寂に包まれたのは一瞬。

次の瞬間にはパニックになったクラスメートが集団で教室を飛び出していった。

「おい！落ち着けお前ら！！」

さすがに先生だ。

暴走しているクラスメートを落ち着けようと後について行った……っあれ？

「おいてかれた……」

気づいたら教室には私一人だった。

これからどうしようかと考えていたらメールが着信。

こんなときに誰からかと思ったら志遠だ。

『無事か？ もしも無事なら剣道場に集合してくれ

ゾンビみたいなやつらには決して近づくな、襲われただけでやられかねない』

なにそれ？

そんな映画みたいなのが起こってるの？

そう思ってさっき皆が覗いてた窓の外をしてみる。

……見ないほうがよかったかも。

だってなんかぱつと見たんだけど地獄絵図だよ、あれ。

……なんか説明したらトラウマになりそうだから割愛させてもらうね。

とにかく。

志遠の言ってる意味は分かったんだけど……

教室のドアにそっと近づいてみる。

ウアアアッ

なんて言いながらそれっぽいものが廊下を徘徊してるよ。

幸いまだこっちには気づいてないみたいだけど。

とりあえず落ち着こう。

この教室から志遠の言ってる剣道場に行くには、当たり前だけど廊下を通らなくちゃいけない。

そして今廊下を覗いてみたら2箇所あるどっちの出口にもあれは歩いていた。

ということはどうちに行ってもあれには遭遇してしまう。

どうしよう？

できるだけあれに遭遇しないように移動することはできないのかな？
そんなことを考えていたら、ふとここが2階だということを思い出した。

そしてベランダのすぐそばには渡り廊下の屋根があることも。

——ここ通れるかも

そう思っただけベランダを覗いてみる。

ベランダから屋根まではそんなに離れてるわけではなく50センチ

ぐらい飛べば大丈夫そうだ。

と、その前に何か武器を探さないと。

さすがに丸腰で移動するのは、この状況じゃ不安だ。

という事で教室をぐるっと見回す。

ぱっと目に付いたのは……掃除ロッカー。

そうだ、あの中に確か先が外されている箒があっただけ。

そしてそれと同時に目に入ったのは教室に入ってくるあれ。

私はとっさに動いて掃除ロッカーに駆け寄る。

そして先のついてない箒の棒を手に取り、今まさに私に襲い掛かるうとしているあれの頭に渾身の面を叩き込む

そのときは本当に夢中で。

いくらそれが人でないと思っけていても、人間の形をしていたあれに何のためらいもなく面を食らわせた私は、その時すでにどこかが壊れていたに違いない。

崩れ落ちるあれを一瞥して次が来ないうちにベランダに行き、屋根に飛び移る。

そしてそのまま振り返らずに私は屋根の上を駆けていった。

振り返ったら何かが崩れてしまうような気がしたから。

003 志遠

誰もいない教室を後にして廊下を足音を立てないように気をつけながら走る。

階段の前で一度立ち止まりあいつらがいないことを確認して踊り場まで一気に駆け下り、また下の様子を確認。

「うう…あああ」

こっちはまだ気づいてないみたいだけどあいつらが1、2、3…
…5体。

とりあえず足音を忍ばせて近づいて、上段からの思い切りの面を近くの一部に叩きつける。

その音に気づいた2体を連続で潰して残りの2体がこっちにこないうちに階段を駆け下りる。

だけどその先には数体のあいつらが。

気づかれる前にその脇を潜り抜け、そのまま連絡通路を駆け抜ける。たどり着いた管理棟には人はほとんどいなかった。

あいつらも…生きてる人間も。

まあ、当たり前か。

管理棟は教室がないぶん人が少なく、そのぶんあいつらも少ない。だからあいつらの脇を駆け抜けるだけで、簡単に校舎を抜けることができた。

「さて、どうするか」

と、言ってみただけやることは決まってる。

グラウンドにも大量のあいつらがいたけど場所が場所だ。

広大な敷地に無秩序にうろついているあいつらに捕まるとは思っ

ないが、やはり遠回りでも人口密度（あいつらを人と同カウントして良いのか？）が低いところを通っていくしかない。

ざっとグラウンドを見渡して大体の状況を把握して、剣道場までの最短ルートを探す。

……渡り廊下のすぐ横を抜けたほうが早いな。

よし、決まったら即行動。

足の筋肉に力を入れて、開放する。

斜め後ろから俺を襲おうとしていたあいつらを自慢の瞬発力で寸前で回避する。

そのままじざぐ走行しながら、あいつらのいないところを通って剣道場を目指す。

その時、目の端でちらっと渡り廊下の上を走っている女子生徒を見かける。

……あんなところ通ろうなんてよく考えたな。

そんなことを考えているうちに目的地に到着。

あいつらが数体ついて来てたから無力化しておく。

他は俺の存在に気づいていないみたいだったから放置。

そのまま剣道場の裏手にある入り口に向かう。

やっぱり授業中だったからこっちの方には人がおらず、あいつらもいなかった。

裏口の鍵は、扉の横にある植木鉢の下。

鍵を開けて中に入ると、外とは全然違ってしゅんと静かな空間が広がっていた。

さて、琴音が来るまでこれからのことを考えるか。

剣道場内にある倉庫でなにか役に立ちそうなものを漁りながらだけど。

とりあえず現状はこの場から一刻も早く避難するのが先決だ。

その為には武器が必要。

俺は剣道部で、そしてここは剣道場。

……武器の苦労はしないでよさそうだな。

それじゃ次だ。

さっき警察に電話したら回線が込み合ってて繋がらなかった。
この意味することはつまり、この状況はこの町だけじゃないってことだ。

少なくともこの県、下手すりゃ日本が全部この状態かもしれない。
それでも生き残っている人間は少なからずいるはずだ。
ならばどこかが避難所になっているはず。

たぶん情報を得るなら警察所が一番だ。

これで目的地は決まったな、警察所だ。

それとこれが一番重要な問題。

食料だ。

今の日本の、どこにでも店があり食料が山ほどあるという状況は輸入によって維持できている。

日本だけの状況だと信じたいが万が一ってこともありうる。

食料はもてるだけ持ったほうが良いだろう。

これは警察所に行く途中で確保すればいいだろう。

よし、こんなものか。

倉庫に誰かが隠していた非常食ボテチを引っ張り出して、ほかに何も無いのを確認してから部屋を出る。

それにしても琴音遅いな。

あいつに限ってやられてることは無いと思うんだけど。

なんて弱気になってたその時。

ガラッ

裏口から誰かが入ってきたような音がした。

警戒にしている俺の目の前に現れたのは、今にも泣き出しそうな顔をしていた琴音だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1089w/>

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD

壊れた日常

2011年11月12日19時13分発行